

女性研究者技術者委員会ニュース

No.20 2007年8月12日

連絡先：日本科学者会議全国事務局 Tel：03-3812-1472、Fax:03-3813-2363

e-mail: zenkoku@jsa.gr.jp ホームページ <http://www.geocities.jp/jsajosei/>

ごあいさつ

女性研究者技術者委員会の発展にむけて

女性研究者技術者委員会 委員長 金子幸代

女性研究者技術者委員会新委員長になりました富山大学の金子です。これまで石渡真理子さんには委員長としてご尽力いただき、心より厚くお礼申し上げます。

今年度からは、新たに委員会通信(ニュース)や会計などを担当していただく事務局長として大阪支部の中村寿子さんをお願いすることになりました。前委員長の石渡さんには、委員会ホームページの管理や男女共同参画学協会連絡会との連携などで引き続きお世話になります。全国常任幹事としてもご活躍いただくことになりました。今後は金子、中村さん、石渡さんの三人体制で女性研究者技術者委員会を発展させていきたいと存じますので、会員の皆様のお力添えをお願い申し上げます次第です。

日本科学者会議の中では女性会員の割合はまだ低く、たとえば私が所属しています富山支部ではわずかに三名という状態です。おそらく地方の支部では、女性がおひとりで頑張っているところもあるのではないかと推察します。そこで、女性研究者技術者委員会委員と連絡委員の拡充をしていきたいと考えています。また、情報交換の場としての紙面作りを事務局長の中村さんをお願いしております。早速、今回は六月につくばで開催されたシンポジウム参加者の元気な声が寄せられうれしく存じます。

全国女性の「オンライン討論会」用メーリングリストが昨年十二月に行われた第16回総合学術研究集会での女性交流会を機に立ち上がりましたが、ぜひ多くの会員の皆様に入ってください、横の繋がりを作っていきたいと存じます。加えて、ネットワーク作りとして全国にいる女性会員のメーリングリストを作っていくことが今年度の仕事です。困難をかかえている女性ひとりひとりの問題について解決に向けて智慧を出し合い、みんなでささえあえる委員会にしていきたいと考えています。

日本科学者会議学術体制部では、来年一月末に「高等教育と科学・技術の真の発展のため」のシンポジウムを開催し、女性研究者技術者委員会や若手研究者問題委員会など各委員会の要求を政策や予算に反映されるように提言作りに取り組むことになりました。皆様の声をぜひお寄せいただきたくお願いいたします。女性研究者技術者委員会の更なる発展にむけて、微力ながら取り組んでいきたいと存じますので、今後ともよろしくようお願い申し上げます。

特集 第12回全国女性研究者・技術者シンポジウム

第12回女性研究者技術者全国シンポジウム

「女性研究者技術者が輝くとき - ポジティブアクションを考えよう」

日時：2007年6月30日(土) 10:30～16:30(10:00開場)

場所：つくば文化会館アルスホール(つくば市立中央図書館内)

第1部 記念講演 「学術の世界における男女共同参画」(11:00～12:30)

浅倉むつ子さん(早稲田大学法科大学院教授)

第2部 報告(13:30～15:10)

前田佐和子さん(京都女子大学教授)「ポスドク・任期付職研究者の出産・育児体験から学ぶ」

今泉温子さん((独)農業生物資源研究所研究員)「私の研究と出産・子育て」(仮題)

御手洗容子さん((独)物質・材料研究機構)「理系研究所における男女共同参画の取り組み」

全大教女性部 「大学・高専における男女共同参画、その取り組みと進展状況」

有賀早苗さん(北海道大学副理事)「北大女性研究者支援室の取り組み」(仮題)

第3部 討議 (15:20～16:30)

主催：第12回女性研究者技術者全国シンポジウム実行委員会

共催：日本科学者会議、日本国家公務員労働組合連合会、

筑波研究学園都市研究機関労働組合協議会、全国大学高専教職員組合

参加者：82名

第12回全国女性研究者・技術者シンポジウム

「女性研究者・技術者が輝くとき」趣旨

実行委員長 石渡真理子

1975年、日本科学者会議の呼びかけで「第1回婦人研究者問題全国シンポジウム」が大阪で開かれた。このシンポジウム開催は、その翌年から始まった「国連女性の10年」や、国連での「女子差別撤廃条約」採択(1979年)など、女性の地位向上にむけての歴史的、国際的にも大きな意義のある時代の始まりを見通してのものであった。その後、シンポジウムは各地の女性研究者・技術者達の努力によって25年間隔で開かれ、名称は変わったが、今年12回目を迎えることができた。

日本の研究者の中で、女性研究者の占める割合は12%弱と、欧米27カ国と比較すると目立って低い。一方、ポスドクターの中の女性比率は約20%、40歳を越えると比率は約30%と高くなり、女性が安定したポストを得にくいことを示している。このことは、学術の世界でも男性の採用や昇進が優先されることが多い上、女性はポスドクの時期と出産・育児の時期が重なり、さらに不利な立場におかれることと無関係ではない。

政府は、国内外の声におされ、また、少子化などによる研究者不足を補うために、最近に

なって、「産休・育休からの復帰支援研究奨励金」(学術振興会)、「女性研究者支援モデル育成」(文部科学省)、「ライフイベント(出産・育児・介護)から研究への復帰支援」(科学技術振興機構)など、女性研究者・技術者の雇用、育成、研究環境などの改善に取り組み始めている。

しかし、それらの恩恵に浴することができる研究者は一部にすぎず、研究資金獲得競争激化などの影響もあって、多くの女性研究者・技術者は、依然としてさまざまな差別的環境の中におかれている。研究者を目指す若い女性たちは、将来の仕事や結婚・出産への不安を抱えている。

また、90年代後半から、パート、派遣、請負など非正規労働者が激増し、「格差」「ワーキングプア」「長時間労働」などが大きな社会問題となっている。このような状況のもとで、男性の研究者も厳しい競争にさらされている。今回のシンポジウムでは、研究者・技術者が、性別に関わらず、人間らしい生活を保ちながら、安定した職を得て、科学・技術の発展に力を発揮するにはどのような運動をおこなっていくべきかを探りたい。

第12回全国女性研究者・技術者シンポジウム報告・議論概要

日本科学者会議女性研究者技術者委員会 事務局 中村寿子

シンポジウムは、2007年6月30日、つくば市で、82名の参加で開催されました。

記念講演の浅倉むつ子氏(早稲田大学法科大学院教授)は、女性の研究活動を阻害する要因が男性に比べて多種多様であること、大学研究室の閉鎖性・徒弟制、女性蔑視等がはびこっていることを、アンケート調査や訴訟事例から明らかにしました。さらに、国の政策、学術会議のとりのくみの経過をふまえて、勉学・研究環境の改善を通じた女性研究者の参加比率を増大、ジェンダー研究の学問的意義と役割、の2点から、男女共同参画へのアプローチを解説。本シンポの論点であったポジティブアクションについては、法律学の視点から「日本国憲法で保障されている男女平等は、形式ではなく実質的なものであり、現状の男女格差は正のために重要であり有効である」と明快に説明しました。

有賀早苗氏(北海道大学教授)が紹介した同大学の取り組みでは、2020年までに女性比率を20%にするという目標を掲げ、具体的なポジティブアクションとして、任期付研究者がその任期中に出産した場合任期を延長できる制度を作り、かつ学部が女性教員を採用すれば人件費の一部を全学運用分の予算から付与する仕組みを作ったことから、採用される女性が増えたそうです。

また、前田佐和子氏(京都女子大学)、今泉(安楽)温子氏(農業生物資源研究所)は若手がポストドク、任期付等、劣悪で不安定な研究環境の中で種々努力している実態を報告、寺田珠実氏(全大協女性部)は、全国の大学における女性研究者の実態や男女共同参画の取り組み状況、法人化による労働環境のアンケート等をふまえて、女性の権利を就業規則へ反映させる取り組みを呼びかけました。また、御手洗容子氏(物質材料研究機構)は同機構における女性研究者の現状と、振興調整費を活用した女性支援モデル、「隠れた人材」の発掘と研究への復

婦支援を行なっているとのことでした。

最後に、男女共同参画にむけての政策・制度の充実を、内閣府総合学術会議等への要望することを採択し、大変充実したシンポジウムを終了しました。報告書を作成中です。ご期待ください。

<参加者感想集>

女性研究者・技術者の結束と男性の協力を

JSA に入会して以来、さまざまなイベントに参加させていただいてきましたが、そのなかで一番深く印象に残ったのは、JSA は男性(しかも年配の男性)の世界だということでした。イベントで見られているのは、ほとんど年配の男性で、女性のほうが指で数えるほど少ないのです。まして、若い女性はまれにしか見えません。このような現状のなかで、何回も参加を躊躇って遠慮したことがあり、このような世界は私にとってはちょっと入りづらいなあというのが率直な感想でした。しかし、6月30日につくば文化会館アルスホールで開催された第12回女性研究者技術者全国シンポジウム「女性研究者・技術者が輝くとき ポジティブアクションを考えよう」が、いままでのイベントと一転して、参加者がほとんど女性(年配のほうが多かったですが)で、男性は数人しか見えなくて、さすが名の通りに女性の集まりとなりました。報告者も全員女性で、シンポジウムの内容も、女性研究者・技術者の育成・雇用、出産・育児、セクシャルハラスメントやアカデミックハラスメントなど、すべて女性研究者・技術者をめぐる課題でした。それらの課題は普段耳にすることはありますが、自分に遠いものだと思い込んで、真面目に考えようという意志はありませんでした。今回のシンポジウムで、報告者が身をもって女性研究者・技術者の実際の研究生活や日常生活などを詳しく紹介し、参加者も報告者に同感した意見などを出し合い、そのおかげで、女性研究者・技術者、とりわけ若手女性研究者・技術者をとりまく厳しい現状がよく分かり、いままで自分が無視してきた課題はまさに自分に迫っているものだと思い知らされました。各報告者から解決方法もいろいろと提案されましたが、それらの課題を解決するには、今回のシンポジウムのように女性研究者・技術者自身が集まって結束して、自分たちが直面している課題を明確にさせたうえで、お互いに解決方法を提案し合うという女性自身の努力はいうまでもなく重要ですが、参加人数の少なかった男性の協力も必要不可欠だと思えるようになりました。女性研究者・技術者のシンポジウムにも他のJSAのシンポジウムと同じような光景が早く訪れるように期待しています。(一橋大学 大学院生 Y)

課題は山積み - 種々の活動を盛り上げよう

6月30日、つくばで開催された第12回研究者技術者全国シンポジウム「女性研究者・技術者が輝くとき - ポジティブアクションを考えよう -」に参加してきました。本シンポジウムは全大教、学研労協、国公労連、JSA との共催(労働組合との共催は初!)で行われ、80名ほどの参加者が女性研究者・技術者の置かれている現状を確認し、支援のための取り組み

について情報交換、討論を行いました。ジェンダー法学会を立ち上げるなど活躍されている浅倉むつ子先生の記念講演も含めて6名のパネラーからの報告(多様で豊富な情報が得られました)があり、その後約1時間の討論というプログラムで進行しました。

現在、わが国の女性研究者の比率は12%弱であり国際的に見て非常に低い状況にあるとともに、女性研究者の多くが不安定なポストや下位のポストに留まっている現状があります(予稿集 p1)。その要因は、出産や育児という物理的な問題だけでなく、女性がこの分野で働くことへの構造的・個人的抵抗感(差別感)があり、意識改革をも必要とする根の深い課題に取り組まなければならない事を意味しています。私自身20代後半の一女性研究者を目指す者として、各報告に真剣に耳を傾けました。

報告で印象に残っていることはわが国における近年の活発な取組みの数々です。わが国における取組みは1970年代後半からあったものの(「日本学術会議」やJSA、「日本女性科学者の会」などの取組み)政府レベルの取組みにまで発展するのは2000年に入ってからと遅いスタートとなりました。現在では、2006年の「第3期科学技術基本計画」に、「女性研究者への支援」という項目がはじめて盛り込まれるなど、文科省、内閣府などによる実態調査や具体的な支援プログラムも行われています(文科省の「科学技術振興調整費」や学術振興会の「産休・育休などの後に研究への復帰ができず休んでいる人のための復帰支援研究奨励金」など)。それを受けて男女共同参画推進機関を立ち上げて取り組む大学も増えています。こうした追い風が吹く一方で、ジェンダーフリーバッシングなどの向かい風が同時に吹いているという現実にも私たちは立ち向かっているという状況でもあります。こうした状況の中においては、各研究者・技術者が各自の研究機関で草の根的な活動を積み上げていくことが大きな力となるであろうし、今回のパネラーの報告では、そういった取組みを種々伺うことができました。具体的には、地球電磁気・地球惑星圏学会が2006年に実施したポストドク・任期付職研究者のアンケート調査からの女性研究者のおかれている実態報告や、物質材料研究機構の男女共同参画チームにおける取組みの紹介など(詳細は予稿集参照)は大変興味深いものがありました。また、女性研究者の業績の悪さは処遇の差によるものであるということ調査した浅倉むつ子先生のご報告は科学的に証明していくことの大切さ、研究者としての役割を改めて認識させられるものでした。

こうして今回のシンポジウムは大成功に終わりましたが、残された課題もあるのではないのでしょうか。大変有意義な報告や討論の場に若い女性の(男性も)院生が全体の参加者に比して少なかったように思います。院生が現在研究・技術職として活躍されている人たちと混ざって種々の活動を盛り上げていけるように、一女性院生としてやるべきことがたくさんあるなぁと強く感じました。

(一橋大学 大学院生 小沢裕香) 表題は事務局

久々に元気をもらったシンポジウム

—第12回女性研究者・技術者全国シンポジウムに参加して—

6月30日(土)つくば駅近くのアルスホールで行われた表記シンポジウムに参加してきました。タイトルに「女性研究者・技術者が輝くとき」とあるとおり、まさに輝いているパネリストの方々の、自身の経験を元にした非常に前向きな講演を聴くことができ、こちらも元気をもらいました。どうも有り難うございました。報告の中では、男女にかかわらず厳しい研究環境、特にポストクという不安定な雇用や労働条件の不備(特に休暇面)など、後ろ向きにならざるを得ないデータやアンケート結果が示されており、確かに課題は山積みです。同年代の常勤と比較すると、結婚や子供の数などで歴然とした違いを示していました。ですが、パネリストの方々をはじめ、各職場での地道な取り組みによって、少しずつでも上層部の意識改革が進んでいる例が示され、少しホッとしました。

特に印象に残ったのは、最後の討論の時に「男女共同参画の取り組みをするにあたって何かアドバイスを。」と言う問いに対してパネリストの方がおっしゃった言葉です。「今、自分の仕事も育児も忙しい中、こういう取り組みをするのは、さらに負担感もあり、行動を起こせる人は少ないかもしれない。けれども追い風が吹いている今、このときを逃すわけにはいかない。これから出産・育児に関わる人達の為にも、少し育児に一息ついた自分たちが少数でも良いからやらなければならないと思っている。」との発言でした。私の職場でも、多くのポストクさんが大変な状況に置かれていて、雰囲気暗いのみで見ているだけに、今回講演されたパネリストの方々も、出席者の皆さんも、みな前向きで元気なので、非常にうれしく思いました。

丸一日の講演会で発表内容が盛り沢山なのに、あっという間に時間が過ぎてしまう、とても充実したシンポジウムでした。このようなシンポジウムに参加させて頂き、どうも有り難うございました。(産業技術総合研究所 川合章子)

第12回女性研究者技術者全国シンポジウムに参加しての感想

私が今回、参加したのは、今春、わが大学の学長の「女性教員の環境として府大はよい方だ」という発言と若い助手(常勤的非常勤)の方が結婚・出産のために辞めざるをえなくなったことを知ったことからである。全国は今どうなっているのかを知りたくてシンポジウムに参加した。

結論からいうと、唖然とした。“府大は遅れている!!”と実感した。国立大学協会は、「国立大学における男女共同参画を推進するために」(2004年)の中で、ポジティブアクションの採用、育児・介護の両立支援などの具体的提言を行い、2006年の「第3期科学技術基本計画」において、期待される女性研究者の採用目標は自然科学系全体で25%となった。また、あちこちの大学には男女共同参画室が設置され、科学技術振興調整費の採択を受けて女性研究者支援モデルを実施している大学では目を見張るような事業が展開されてきている。今回のシンポでも、物質材料研究機構での取り組みや北海道大学でのポジティブアクションであ

る Triple Twenties 計画の具体例を生き生きと報告される姿は本当にまぶしかった。同時に、注目される報告として、地球電磁気・地球惑星圏学会のアンケート調査結果がある。ここでは、任期制のあるポスドク身分では出産・育児はキャリアの形成にマイナスになるという理由で子どもをもてない姿が浮かび上がってきている。若手研究者の研究と結婚や出産・育児の両立を図るためには、女性研究者の環境改善だけでなく、男性も含めて差別的な労働環境の改善を図る必要があることがわかった。

最後に、お願いがある。任期付きあるいは非常勤若手研究者でも出産の時には正規職と同じような手当や制度があるところがあれば、教えていただきたい。

(京都府立大学 上野 勝代)

シンポジウムに参加して

シンポジウム『女性研究者・技術者が輝くとき』は「女性研究者・技術者のおかれている現状を認識し、どのような支援の取り組みがなされているかを知り、参加者が各々何ができるかを考える」ことを目的として開催されました。浅倉むつ子さんは記念講演「学術の世界における男女共同参画」で、ご自身が女性であるために、大学で研究テーマを決める時も就職する時も大変なご苦労をされたという体験をまず紹介されましたので、男女共同参画を実現したいという強い想いが伝わり、お話がとても良く理解できました。次いで5人の方が、ポスドク・任期付職研究者のアンケート調査結果、研究と育児の両立、理系研究所、大学・高専における男女共同参画の取り組み、ポジティブアクション北大方式について報告されました。いずれも女性研究者・技術者の現状と、現状を打開するための努力がわかる良いお話でした。最後の討論では、文部科学省による「女性研究者支援モデル育成事業」に関連した議論、男性の育児参加、女性の割合を達成できる数値目標として示すことが大切だと強調されたことなどが印象に残りました。ポスドク・任期付職の厳しい現状には、改めて改善への努力を続けなければと痛感しました。(東京支部 森崎尚子)

全交流 zenkoryu@freeml.com MLの紹介

発端は、06年日本科学者会議(JSA)第16回総合学術研究集会での分科会や懇親会などに参加した者が元気に会食した時、論議をもっと日常的に続けられたらね、という発案からスタートしました。

女性も男性も、JSA会員に限らずいろいろな立場の人が参加しています。仕事や学びの相談ごと、意見、近況、会合に参加した感想、読書感想、ニュース、etc. 研究者・技術者のジェンダーにかかわる議論はもちろん、自衛隊でのすざまじいセクハラ・パワハラを訴えた、勇気ある女性自衛官の話、マスコミが伝えないイラクの情報等、なんでもありのMLです。入会希望者は、HPへ、または会員へ入会希望を伝えてください。

(登録世話役 白井浩子 岡山大学・生物学)

シンポジウムで採択した要望書

備考) 内閣府の総合科学技術会議と男女共同参画局へ提出しました。後者の文面です。

2007年8月10日

要 望 書

内閣府特命担当大臣(少子化・男女共同参画) 高市早苗殿

第12回女性研究者技術者全国シンポジウム

「女性研究者・技術者が輝くとき - ポジティブアクションを考えよう」

実行委員会・参加者一同

代表 実行委員長 石渡眞理子(日本科学者会議常任幹事)

参加団体 共催: 日本科学者会議、日本国家公務員労働組合連合会、

筑波研究学園都市研究機関労働組合協議会、全国大学高専教職員組合

協賛: 日本私立大学教職員組合連合、東京地区私立大学教職員組合連合

後援: 男女共同参画学協会連絡会、平和と民主主義のための研究団体連絡会議

私たちは去る6月30日、つくば市において、表記のシンポジウムを開催いたしました。このシンポジウムでは、多くの参加者から女性研究者・技術者の現状が報告され、女性研究者・技術者が未だに男性に比して低い地位におかれ、採用・昇進等における性差別も解消されていないことが明らかとなりました。

女性研究者・技術者や、研究者・技術者を目指している女性たちは、差別や偏見のない研究環境で、自らの能力を活かし、磨きをかけ、社会に貢献したいと願っています。また、結婚・出産・育児・介護などの家族的責任を果たすことと、自立した職業人としての研生活とが両立できるような制度的保障を求めています。そのために、広い視野と長期的展望にたった、科学技術政策や労働政策の改善も望んでいます。

シンポジウム参加者一同は、貴職が女性研究者・技術者の環境改善に努力されていることに敬意を表しておりますが、以下に掲げる要求実現のため、なお一層努力されるよう要望します。当事者能力のない課題に関しましても、関係機関に働きかけていただきますよう、強く要望いたします。

1. 全ての大学・研究機関に対し、男女共同参画推進委員会またはこれに相当する機関の設置を働きかけること。また、その機関において、以下の取り組みをすすめるよう指導すること

(1) 大学・研究機関の全構成員がポジティブアクションの意義を正しく理解するた

めの方策を立てること。教員、研究員、職員の採用、昇進にあたって、性別比率のアンバランスを解消すること

- (2) 大学・研究機関の全構成員がジェンダーに対する正しい理解を持つこと
 - (3) 雇用形態を問わず産前産後休暇、育児・介護休業がとれるような労働協約をむすぶこと。また、出産・育児・介護期にある女性研究者の地位を保障すること
 - (4) 研究施設内託児施設の設置と整備・運営費補助などをおこなうこと
 - (5) セクシャルハラスメントやアカデミックハラスメントなどの人権侵害をなくすること
 - (6) 文部科学省「女性の多様なキャリアを支援するための懇談会」第1次報告「多様なキャリアが社会を変える」(女性研究者への支援)(2003年)や国立大学協会報告書「国立大学における男女共同参画を推進するために」(2004年)等で出された提言を具体化すること
 - (7) その他、女性研究者・技術者の要望を積極的に取り入れること
2. 大学・研究機関の間で、男女共同参画推進の取り組みについての経験交流・情報交換を行なうよう指導すること
 3. 出産、育児、介護中の研究者にたいする支援をさらに充実させること
〔出産・育児・介護のためにやむを得ず研究を断念せざるを得なかった者のために、「特別研究員 RPD」(学術振興会)や「戦略的創造研究推進事業」(科学技術振興機構 = JST)による救済策が実現しましたが、恩恵を受けているものはごく少数と考えられます。大幅な枠の拡大を求めます。〕
 4. 科学技術振興調整費による新規課題「女性研究者支援モデル育成」(文部科学省)枠を拡大し、利用条件を改善すること
(現在1年に10件の育成事業が採択されていますが、採択された大学・研究機関では女性研究者の比率が上がり、研究意欲が促進されるなど、積極面が見られます。しかし、小規模な大学・研究機関では応募することさえ困難との声もあります。このままでは、女性研究者間の格差拡大につながります。また、女性研究者の切実な要望である保育施設充実に予算の利用制限があるなど、現実と乖離した面もみられます。早急な改善を要望します。)
 5. ポストドクター・任期つき研究員の現状を改善すること。当面任期の延長、労働条件の抜本的改善をはかること
 6. すべての研究者にバランスのとれた予算配分をおこなうこと
(重点的な分野とそうでない分野への予算配分に過大な格差が生じないように配慮をお願いします。重点的な分野での女性研究者比率は、生物系を除くとかなり低く、結果として女性への研究予算の配分にアンバランスが生じる可能性があります。)
 7. 研究者間の行き過ぎた競争をおおるような政策はとらないこと
(女性研究者は男性研究者に比べ、家事・育児に費やす時間が圧倒的に長いことが調査

でも明らかにされており、研究時間の面だけをとっても男性研究者よりも不利な状況があります。過度の競争的環境においては、負荷を背負った女性が研究への意欲そのものを失うことにもなりかねません)

8. 選択的夫婦別姓の法制化を早急におこなうこと

(結婚前と結婚後で、発表論文等に記載される名前が変わることは、その後の業績評価に多大な影響を与えます。多くの既婚女性研究者が、通称の使用や旧姓との併用などで論文を発表していますが、女性に不利益をもたらすケースも発生しています。)

9. 自治体などに対し、保育所整備計画による保育園の増設、延長・夜間・病後保育の実施、運営費の増額を働きかけること。学童保育の設置基準をつくり、予算を増額すること

10. ワークライフバランスの推進に積極的にとりくむこと

(全ての国民が、人間らしい生活を維持できるよう、長時間労働や、不安定雇用をなくす努力をお願いします。)

以上

女性研究者技術者委員会ホームページ

<http://www.geocities.jp/jsajosei/>

情報や資料など

新聞記事切り抜き / 男女共同参画に取り組んでいる大学・研究機関 /

育児支援・保育所などに関する情報 /

報告書・雑誌の特集 / 統計資料 / 女性を対象とした研究助成金・奨励金・賞の募集 *New* /

各地の女性研究者の会や科学者会議女性会員の活動報告

北海道女性研究者の会 / 東京支部女性会員のページ / 愛知女性研究者の会 / 女性研究者の会・京都 / 大阪支部 Up06/03/06 (BSE 学習会報告) / 岡山女性研究者連絡会

リンク

「男女共同参画学協会連絡会」 / 大学婦人協会」 / 学会会場における保育室」 / 男女共同参画委員会のある学会、大学 / 女性研究者の会 / など

お知らせ

北海道女性研究者の会の通信が届いています。
ご希望の方に頒布しますので、JSA 事務局まで。